

国土館の思い出

## 国土、海を渡りて

### —— 国土館ブラジル支部の回想 ——

法学部二期生

伊井 克己



「国土、海を渡りて五〇年、志し半ばにしてブラジルの赤土と化す」

学生時代に聞いたブラジルへ開拓に渡った日本人の言葉である。

国土館大学入学後、空手道部に所属していた私は、先輩方が卒業後ブラジルのパラ州ベレン市にあった国土館ベレン支部へ空手道指導員として赴任していく姿を他人事のように見ていた。数年後の一九八二（昭和五七）年六月、母校国土館から業務命令を受け地球の裏側のブラジルへ赴任することになるとは当時夢想だにしていなかった。

### 国土館とブラジル

日本とブラジルは一八九五（明治二八）年に「日伯修好通商航海条約」を締結、国交を結び、奴隸制を廃止（一八八八年）し新たな労働力を移民に求めていたブラジルと、日露戦争（一九〇四年～一九〇五年）後の不況による失業者の増大などから国外への移民政策を積極的に進めたい日本との間で移民の送出が始まった。排日運動が吹き荒れる北米・カナダへの移住が期待出来ないなか、ブラジルへ希望をつなぎ一九〇八（明治四一）年四月二八日、最初のブラジルへの日本人移民をのせた「笠戸丸」が神戸港を出航した。アマゾンへの日本人移住は鐘紡の出資により設立した南米拓植会社（社長・福原八

郎)による一九二九(昭和四)年パラ州アカラ植民地への第一回日本人移民一八九人に始まる。

ブラジル国アマゾンナス州政府からの日本人移民の要請は、当時衆議院議員であり国士館理事であった上塚司(ブラジル移民の父といわれた上塚周平の従弟)が中心となり、一九三〇(昭和五)年四月、アマゾン開拓の指導者養成を目的とした国士館高等拓植学校の設立へとつながった。その後、国士館内部で発生した意見対立により上塚は国士館から離れ、新たに日本高等拓植学校(昭和七年五月三一日認可)を登戸に設立した。国士館高等拓植学校は一九三四年(昭和九)十一月一日に廃止され、国士館によるアマゾンへの開拓指導者派遣事業は一九三二年(昭和七)年四月一六日に同校二回目の卒業生(高拓生)をアマゾンへ送り出したのを最後に幕を閉じた。

五〇年後の一九七九(昭和五四)年一月五日、アマゾン日本人移住五〇周年記念祭に慶祝使節団を送った国士館は、同記念祭での高拓生との再会を機に日伯の武道・スポーツ・文化交流を目的とした支部の設置を決めた。

一九八〇(昭和五五)年七月、国士館大学はパラ州立大学、サンパウロ州立大学(以後USPと呼ぶ)との間

でそれぞれ武道スポーツ教育交流協定を締結し、その年の九月には国士館大学からの派遣教官山本英雄がベレン支部とパラ州立大学で空手道の指導を開始している。時を同じくしてサンパウロでもUSP等で剣道と柔道の指導が開始されている。

## 高拓生

私の学生時代、アマゾン開拓に関しては多くの本が出版されており開拓の苦労が筆舌に尽くしがたいものであったことは承知していた。ベレン支部責任者の越知栄先生は、国士館専門学校の前身である国士館高等部の卒業生で国士館高等拓植学校第一回卒業生(高拓生)の引率監督者として一九三一(昭和六)年五月二〇日神戸港を出航し、アマゾンに渡った国士館の大先輩であった。アマゾン日本人開拓五〇周年祭で国士館が高拓生と再会した事を機にベレン支部の責任者を越知先生にお願いすることとなったのである。

ある日、越知先生のご自宅に夕食の招待を受けた時、アマゾンに渡って間もないころのお話をされたことがあった。入植当時、その自然環境の厳しさから作物が根付き成長することの心配よりも人間が生きて行けるかど

うか分らない環境であったことや、全くの原始林での伐採作業の過酷さを聞くことができ、日本人移民がどれ程の苦勞と努力の末に今日の隆盛を得たのかと考えさせられ心に深く残った。開拓団の生活について高拓生を引率し監督的立場にあった越知先生から直接当時のお話を聞いたことは貴重なことであった。

越知先生は殆ど毎日のようにベレン支部武道館の道場に顔を出され稽古を見学することを日課とされていたが、体力の衰えからか、だんだんとお顔を拝見する機会が少なくなっていた。当時越知先生はブラジルへ渡ってきてからの歴史をまとめていと話されていたが私のベレン在任中に完成されることはなかった。

私はその後サンパウロへ移り、一九九五（平成七）年にブラジルでの任務を終え日本へ帰国したため、越知先生とはベレンを離れて以来お会いすることはなかったが、その後、越知先生が亡くなられた事を知り、まさに巨星が墮ちた脱力感を覚えた。開拓者として海を渡った先輩方の歴史を留めておくことは後世に残された後輩の責務であろう。

## 転換

母校国士館からブラジルのベレンへ行つて空手道の指導をしてくれないかと相談を受けたのは大学卒業後、会社勤めを始めて間もないころであった。私は子供のころ古い師にみてもらったことがあり、将来親元を離れ外国で暮らすようになると言われたそうである。いつごろからか外国で暮らしてみたいという漠然とした願望を持っていた私は、ブラジル赴任の依頼を受け大きく心を動かされ運命のような流れを感じた。アマゾン川河口の町ベレンという、その当時の生活からはあまりにかけ離れた世界に、当初戸惑いはあったが、心の整理をつけるのにそれ程時間はかからなかった。

私は一九八二年四月一日付けで国士館に奉職した。前年には空手道部同期の大木陽悦と鈴木克彦が国士館に奉職し後輩の指導にあたっており、私はベレンへ出発するまで渡航準備を進めながら大学の道場で稽古を続けた。日本を出国する数日前、国士館の海外事業を統括していた国際部の教職員の方々に大学の近くにあった「花壇」というレストランで壮行会を開いていただいた席で、当時国際部副部長だった柴田徳文先生から「骨は私



空手道部同期の仲間（4年生時）（後列左端が筆者）

が拾う」と饒別の言葉を頂いたことが忘れられない。

## ベレン着任

一九八二年六月一七日夜、飛行機のタラップからベレン空港に降り立った。熱帯特有の熱気に包まれ、緑に囲まれた飛行場に大きく「BELEM」とネオンに光る文字を見た時の何ともいえない気持ちを今でも忘れることが出来ない。

この後、一九九五年三月にブラジル勤務を解かれ日本へ転勤帰国するまでに日伯間を八往復し延べ一三年間のブラジル赴任生活を送ることとなった。

私のベレン赴任の目的はベレン支部の前任空手道指導員が帰国することに伴う後任空手道指導員として空手道の指導に当たることであった。ベレン支部は国士館が現地に設置したパラ国士館大学協会（SOCIEDADE KOKUSHIKAN DAIGAKU DO PARA 一九八〇年六月三日ブラジル国認可）を实体とする組織であり、越知栄理事長、東久一理事（高拓生）、町田嘉三理事（空手道師範）の責任体制で運営管理されていた。日本からの派遣空手道指導員は山本英雄、続いて車田享一、伊井克己、飯田隆男、川口雄大と続いた。山本英雄はパラ州立



ベレン支部武道館看板

大学でも客員教授として週一回空手道を指導していた。ベレン支部では汎アマゾンニア日伯協会から山科守剣道師範を迎え剣道指導も行われており、後に日本から剣道指導員として浅野誠一郎、柔道指導員として後藤啓之が赴任しベレン支部にて指導が行われた。

日本からの指導員は就労ビザが取得出来ず観光ビザで入国しているため、六か月ごとに帰国し再度観光ビザを取得して再渡伯するやり方を繰り返していた。前任者の車田享一がビザの切替えて一時帰国し再渡伯するのに合わせて、同じ航空機で私もベレンに赴任した。

### ベレンでの生活

ベレン到着直後は時差ボケ、現地生活への対応、着任後手続き等もあり町田先生から一週間くらいはゆっくりするようにと長旅を労わられた。ベレン支部武道館一階道場脇の一部屋が指導員用の部屋であったが、二人の指導員が生活するには無理があったので武道館から歩いて一〇分くらいの所に車田指導員と二人でアパートを一室借りて共同生活を始めた。

同武道館はベレン市のキンチノ・ボカイウーヴァ通り一六五七番にあり、大きなバス通りに面した市の中心

に所在し生活には大変便利などころである。ベレン市中心街の街路樹は樹齡三〇〇年を越すマンゴー並木で雨季（二月～五月）になると街中のマンゴーが実をつけ、風に吹かれて実を落とし街中がマンゴーの香りで覆われる。この時期はバスに乗っていても屋根にマンゴーがゴトンと落ちると運転手はバスを止めて拾いに行くが乗客は文句を言わない。商店やオフィスの前にマンゴーが落ち人々が拾いに家から飛び出す光景は南国らしく微笑ましい。私も早朝早起きしてマンゴーを拾ったこともあったが、子供達がマンゴー拾いをして小遣い稼ぎをしている邪魔をするような気がして止めた。マンゴーの季節には、一日中マンゴーの木の下で、落ちてくるマンゴーを売って暮らしているような者も現れる。

ベレンの気候は、雨季では三〇度～三二度くらいで湿度は八〇～九〇%と高温・多湿だが、日中にスコールという三〇分くらいの一時的な雨が降り気温が下がる。植物が多く茂っているため日陰に入ると涼しく夕方は風もありしのぎ易い。このような気候なので普段は短パンにビーチサンダル、上はTシャツかランニング、くつろいだところでは上半身は裸ですごしていた。しかし、日中の日差しは強烈で、昼時間一二時～一四時ころは特定の商店街以外は店を閉めている。着任直後、そうとは知ら

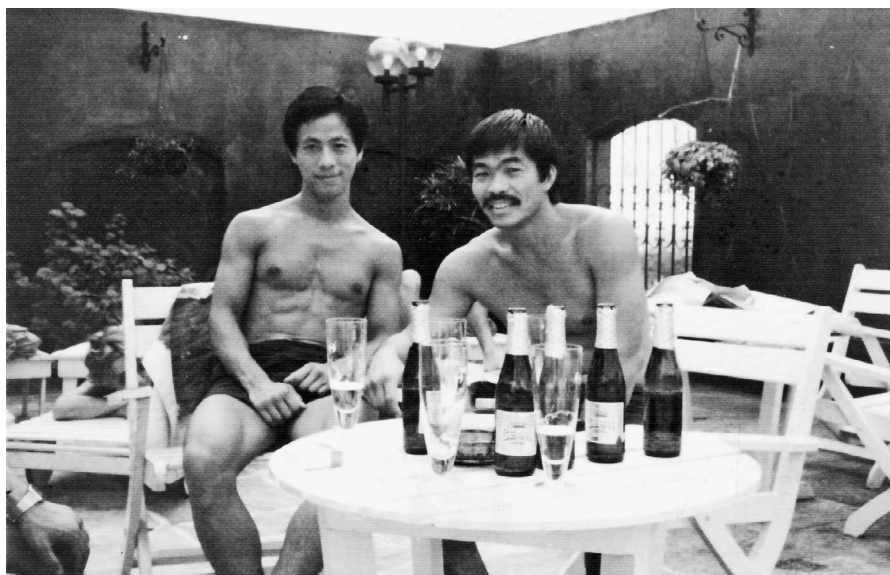
ずに昼に買い物に出たところ、探しているものを買っている店はどこも閉まっており二時間近く炎天下を探し回り、結局諦めて帰ったが熱中症のようになり寝込んでしまったことがあった。

武道館二階には町田先生が家族と暮らしていた。町田先生にはベレン滞在中の生活全般に渡りお世話になり、その後一九九五（平成七）年に日本へ転勤した後も空手道を通じて交流が続いている。町田先生は日本大学卒業後、一九六八（昭和四三）年「あるぜんちな丸」で農業技術者としてブラジルへ移住、その後、学生時代から志しを持っていた空手道を極める道に進んだ。

NHKはこの「あるぜんちな丸」で渡伯した乗船者をその後一〇年ごとに追跡取材し、移民ドキュメンタリーシリーズとして「移住三十一年目の乗船者名簿 前編・後編」（二〇〇〇年三月放映）まで制作してTV放映しており町田先生も毎回出演している。町田先生は何かと食事に誘ってくださり、武道館二階の自宅でビールや地酒ピンを飲みながら先生の話を聞くのも楽しいひと時であった。休日にはベレン名物のカニを食べに行ったり、先生が会員となっている軍隊将校クラブのプールサイドでビールを飲んだりした。

町田先生にはブラジル人の奥様との間に四人の子供た





1982年10月頃 軍隊将校クラブプールサイドにて（右より町田師範、筆者）

ちと養子が一人いて全員男の子である。それぞれ個性的ではあるが特に三男の Lyoto は父親の血をひき格闘技の道に進み、二〇〇九（平成二二）年五月にはアメリカの UFC（アメリカ最大の総合格闘技団体）でライトヘビー級チャンピオンとなった。私のベレン在任中、Lyoto はまだ四歳で他の兄弟と一緒によく私と遊んでいたが、その頃から物怖じしないところがあり、近所の子供たちと喧嘩をしても度胸が据わっていた。二〇〇〇（平成一二）年には、アントニオ猪木にスカウトされ、新日本プロレスに所属し世界の格闘技界で活躍するようになり日本で再会したが、私の車に乗るにも体を屈めなければならぬ程の巨体ながら幼かったころの人なつっこい笑顔は相変わらずだった。

北京オリンピック柔道金メダリストの石井慧が総合格闘技へ進み、二〇〇九年三月に Lyoto Machida を頼りベレンの町田道場（旧国士館ベレン支部武道館）で修行したことは有名な話である。

### 熱帯での稽古

一週間ほどして体も慣れたところでベレン支部武道館の空手道指導を開始した。武道館の指導体制は町田先

生、車田、伊井ともう一人現地雇いの指導員カルロスの四人で、月曜日から金曜日まで七時～八時の指導員稽古、九時～一〇時のレッスン、一六時～二〇時まで一時間ごとの四レッスンをシフトを組んで指導していた。毎週木曜日の午後は地方のカスタニールという町の公民館のような場所を借りて出張指導も行った。

毎朝七時からの時間は町田先生による指導員稽古で、ベレンの他流派道場の指導員も稽古に参加していた。熱帯地域での稽古は気温も湿度も高く、とにかく発汗がはげしく道着はもちろん帯からも汗が滴るほどだ。車田指導員は既に半年以上熱帯で稽古していて体が適応したのか平気な顔で黙々と体を動かしている。

毎回の指導員稽古が終わると疲労困憊した体を引きずり道場並びにある日系の食料品店で冷えたココナッツ椰子を買求めた。店主で日系人の瀬戸さんが大刀でココナッツの上部を切り開けてストローを添えてくれ、その場でいっきに飲み干すと体中にココナッツジュースがしみわたりホッと一息生き返る。着任した当初はとにかく暑さとの闘いで他のことはあまり考えられず体もいっきに痩せていった。

## アサイ

熱帯のベレンは普通に生活しているだけでも疲れるところ、稽古と指導でいきなりバテてしまった。町田先生からアサイを食べたら元気になると教えてもらい、早速食べたところ翌日には元気が出てきた。それからは疲労が重なりしんどい時は、近所でアサイを買って食べることにしていた。

アサイはアマゾン特有のヤシ科の果物で鉄分が多く含まれており、最近では日本でも評判になっている。直径2cmに満たない位の大きさと、殆どが種で回りが薄皮のブルーベリー色の実でアマゾン河流域の湿地帯に茂っている。妊婦が食べると胎児が成長し過ぎて出産出来なくなると云われているほど栄養価が高く、熱帯雨林の厳しい環境下で労働する現地の人たちには欠かせない食べ物である。

アサイは普通の商店では売られておらず、アサイ専門の店で午前中だけ売られていた。街のところどころにバ拉克小屋のような売店があるが必ず開店しているとは限らず開店しているときは店の前に四角の赤い旗が出ている。売店ではアサイの実を、中が攪拌機になっている



専用の機械に入れ、ゆつくりと回転させ薄皮が擦れ合いどろどろの液体となつて下に溜まるジュースを原液のままや水で薄めて売っている。奥地で暮らす現地の人達は大きなタライのような器にアサイの実をいれて手で実を擦り合わせアサイのジュースを作るらしい。買ってきたアサイを器に移し砂糖をくわえてスूपのようにして食べるかフアリーニヤというマンジョーカ芋で作った粉を混ぜて食べる。水に薄めてジュースのようにして飲む人もいる。厳しい気候風土の環境下に与えられた天の恵みといえる果物アサイに感謝である。

## 武道館の増築工事

一九八二年当時、ベレン支部武道館は表通りに面した門から入ると建物正面入口に受付、建物左脇に真直ぐ裏庭までの路地があり、路地に見学者用の椅子が並べてあった。路地から入れるワンフロアの板の間道場があり奥にはシャワールームとトイレ、部屋が二室あり一室は女中部屋でもう一室が指導員部屋である。路地を突き当たると裏庭があり巻き藁が二本たててあった。

一九八三（昭和五八）年一月三〇日、日本でビザを取り直して再度着任したとき、武道館は前年暮れから増築

工事が始まっており、前年一時帰国前にアパートを引き払っていた私は工事の間、武道館から少し離れた旧市街にある日本人経営の鈴木旅館に宿泊して武道館に通うようになった。鈴木旅館は長年に亘るこの地での日本人への貢献により日本政府から表彰され、感謝状がサロンに飾ってあった。この旅館には前任の車田指導員も帰国前に二か月ほど道場の増築工事のため宿泊している。部屋は六台ほどのベッドが横一列に並んだ病院のような共同部屋で、他の客も宿泊しておりプライバシーは殆ど無い。

鈴木旅館では毎朝、「オ、ミラベル！」と地元新聞の名前を張り上げながら売り歩く子供の声で目が覚める。宿泊客の半分以上が日系人である。この時期の生活は、鈴木旅館から武道館へ朝稽古に行き、午前中のレッスンがある日はそのまま残り指導。昼はいったん旅館に戻り昼食後、また武道館へ戻るといふ日課であった。

旅館では夕方、食事の準備が出来ると宿泊客が食堂に集まり大きな食卓を囲む。港町ベレンの食卓は、刺身に始まり煮魚、焼き魚、揚げ魚と魚三昧である。日本から移民として渡ってきた人が多く、特に独り身の男性が目立った。大学出たての日本の若者が珍しいのか、何かと話しかけてくれた。それぞれの人がいるいるな思いで日

本から地球の裏側に渡ってこられ、成功した人、農業がうまくいかず都会へ流れてきた人など戦前戦後の日本からの移民の人達の生き様を垣間見ることが出来た。

四月か五月頃武道館の増築工事も終り、一階奥にあった二部屋、シャワー室、裏庭までをつぶして板の間道場を拡張し、二階には町田先生の住居の他に指導員宿泊室が二室、トレーニングルーム、シャワー室、トイレ等を新設した。私は鈴木旅館を引き払い武道館二階に新設された指導員宿泊室に入った。

港にはベロ・ペーズという野外市場があり、食べ物から日用品、怪しげなものまで何でも売っていた。ある日散策していると市場の奥で小さな猿が私の目にとまりすぐに気に入った。シャツの胸ポケットに入ってしまう位の小さな焦げ茶色の猿で道場生の人気者となり、一人暮らしの私の心も和ませてくれた。外に出るときは肩にのせたりポケットにいれたりして可愛がっていたが、素人の私には飼育は難しく、いつのまにか逃げてしまった。

## 稽古仲間

一九八二年一二月、車田指導員が帰国した後、練習生への指導は町田先生、伊井、カルロスの三人でシフトを

組んで行っていた。カルロスは年齢三〇代中頃、身長一八〇cmくらい、褐色の肌をもち、がっちりした体格で空手道の指導を職業としていた。

私がベレン支部に赴任し、指導を開始したころ、私とカルロスはコミュニケーションがうまくとれていなかったが、ある日の稽古をきっかけに心を通わせることが出来るようになった。その日の夕方は、練習生が多く、カルロスが担当するレッスンに私が補助につき、練習生と一緒に私も汗を流していた。当時、道場は多くの練習生や見学者で活況であった。増築前の道場は一レッスンに練習生が三〇人も来ると道場は一杯で全員揃つての移動、基本などは隣と接触しないように気を使っていた。

稽古の後半に二人ずつ向かい合い自由組手が始まり、何順目かに私とカルロスが向かい合い拳を合わせる事となった。カルロスは馬力があり組手稽古で向かい合うと、その力強い技に押し込まれることも多々あった。前任者の車田指導員は五本組手でカルロスの前蹴りを受け損ない右手を骨折したこともあり、基本稽古でも油断は出来なかった。

自由組手が始まって暫くは互いに様子をみながら技を出していたが、カルロスが背後の練習生に気をとられた瞬間、私の上段回し蹴りが彼の左側頭部をとらえた。彼



1983年4月 ベレン支部武道館増築後の空手道大会（左手前よりカルロス指導員、筆者）

の形相が変わり次の瞬間、右の肘打ちを私の頭部に打ち込んできた。私は蹴り技を繰り出した後、連続した逆突きでカルロスの懐に入っており、カルロスの肘打ちは技がつまり肘の先端ではなく小手の部分が私の頭部に当たった。続けて左の肘打ちが打ち込まれてきたので体を相手にあずけてかわし、そのままつかみ合いとなり、もつれて互いに倒れこんでしまった。互いに起き上がったが、回りの練習生たちは指導員同士の組手に注目し、動きを止めてしまっていたのでカルロスは組手稽古を終わらせ、整列させ稽古を終了させた。

その日、練習生が全員帰り、着替えをしている時、カルロスが私に話しかけてきた。稽古中に蹴り技を頭部に受け冷静さを失ってしまったことを反省していると、私に打ち明けてきたのだ。ポルトガル語が不十分な私に理解出来るようにゆっくりと話すカルロスの態度に誠意を感じ、この時から私とカルロスは互いに信頼関係を築けたと思っている。

肘打ちという技は現在の空手道の試合では有効技としては認められず、普段の稽古においてもコントロールが難しく危険な技であるため稽古以外で使うことは少ない。しかし、反射的にこの様な技を繰り出してくるといふのは、空手道をより実戦的にとらえ稽古のなかで身に

つけてきていることの現れである。世界的に競技としての空手道が広まる中、この地では武術としての空手道が根強く息づいていることを強く感じた。

巻き藁一〇〇本突きを始めたのもこの頃である。拳頭の皮が破れ、拳に手拭いを巻いて巻き藁を叩き続けたのも、地力を高める必要性を教えてくれた稽古仲間のカルロスがいたからである。

## 銃社会

ブラジルでは条件を満たせば国民は銃を携行所持できるということは聞いていたが、それがどのような社会を意味するかまでは全く実感としては捉えていなかった。

ベレンに着任して間もない一九八二年八月頃、指導を終え剣道師範の山科守先生と日本食レストラン「博多」で夕食をともししていた時のことである。店の奥にあるカウンター席で山科先生とビールを飲んで雑談をしていると、入口近くのテーブル席にいたグループが口論を始めた。大きな声を出していたので注目していたところ、一人の男が店の外に出て暫くすると何かを振りかざして戻ってきたのである。そのグループから悲鳴が聞こえると同時に店内にいた客の殆どはテーブルの下や調理場へ

姿を隠し、山科先生と私だけがカウンターに腰掛けていた。

私は何か考えがあつて逃げなかったのではなく、入口のほうで何が起こっているのか理解出来ていなかったのである。しかし、一緒にいた山科先生は何が起きていますか理解しており、私に男が銃を持っていると教えてくれた。それでも私は動こうとしなかった。横にいた山科先生がまったく落ち着いた様子で椅子に座っていたからである。男は銃を持ち怒鳴り続けていたが、おもむろに山科先生は立ち上がって平然とその男の前へ進み出た。何か話している様子であつたが、暫くすると男は銃を下に向け入口から出て行った。

ただ啞然として眺めていた私は戻ってきた先生に「大丈夫ですか？」と尋ねると、「ん、本気で撃とうとする者はあるんなに銃を振りかざしたりしないものだよ、脅しで振り回していただけだ」と事も無げに言われたのだった。先生のとつた行動の是非はともかく、銃をもつた相手に素手で向かい合い、事を片付けてしまった先生のその胆力には驚かされた。

この後、いろいろなところで銃社会の現実と向き合うこととなる。ベレンからサンパウロへ勤務が異動した後、サンパウロ支部武道体育館で合宿を行った際、食堂

でミーティングをしていた時に何の弾みか銃の話題となり、参加者各自の車や合宿バッグから銃が集まり、食堂の机の上に一〇丁位の銃が並んだ時には、市民が普通に銃を携行している事に正直驚かされた。

また、郊外の国道を車で移動していた時、前を走っていた友人の車が行きずりの車に抜かれたのをきっかけに抜きあいが始まり、相手の車が前に出たところで路肩に止まれと合図をしてきたようでも友人も路肩に停車した。

私も何か嫌な予感したが仕方なく後方に停車して様子を伺うと、相手側の車から銃を持った男が降りてきて車の窓越しに友人の頭に銃を突きつけた。時間にして数分だと思うが友人は無抵抗でやり過ごし、運よく何事も無く相手の車は走り去ったという出来事があった。

さらに、サンパウロのリベルダーデという日本人街にあるブラジル日本文化福祉協会ビルの角にある公衆電話で通話をしているときに、背後からいきなり二人組に脇腹に銃を突きつけられた事があった。ホールドアップで銃を突きつけたまま背後からGパン後ろポケットの財布を抜き取り走り去って行った。ブラジルの公衆電話は頭が隠れる程度の笠のようなものがあるだけで、通話に集中していると体が無防備になる。この出来事以降、外出先では路上の公衆電話を使うことはなくなった。人の家を

訪ねるときは遠くから手を叩いて近づく合図をする、いきなり近づくとは発砲される危険があるからだ。ブラジルではお互いが銃を所持している可能性があるため、日頃からの危機管理意識は日本にいる頃とは全く異なった。

## ブラジルの国技サッカー

私がベレンに赴任した一九八二年はサッカーワールドカップ・スペイン大会（イタリア優勝）の年で私が着任する四日まえに開催されたばかりでブラジル国内はまさにサッカー一色。街中の道路、壁にはブラジル国旗が描かれ、家の周りや電線には紙製の国旗が飾られ、ブラジルを鼓舞する音楽がどの街角からも流れていた。ブラジルの試合がある日は誰もがテレビ観戦するため商店、会社、役所までも開店休業状態で、街頭には人が全くいなくなる。ブラジルが試合に勝つと街全体がカーニバル状態となり大きなブラジル国旗を振り回す車と音楽が街中にあふれ、夜半まで騒ぎ通しとなる。

この大会で優勝したイタリアチームとブラジルが対戦した日、私はテレビもラジオもないアパートで、近所から聞こえてくる実況放送を聴きながら窓の外を眺めていた。実況放送で流れてくるポルトガル語の内容は理解出



来なかったが、ブラジルに点が入ると街中に歓声が湧き起ると同時に花火と爆竹が鳴り響き、逆に点を取られると彼方此方から大きな悲鳴と叫び声が聞こえるので実況の内容は分からなくても点数だけは分かった。このワールドカップでのブラジル代表は、後に日本でも活躍したジーコをはじめ歴代最高のチームと呼ばれていたが、このイタリア戦で敗れてしまった。

### カラランゲージョとタカカ

武道館前のバス通りをはさんだ真向かいにはレストラ  
ンがあり稽古の後に生徒たちがビールを飲んでた。誘  
われることもあったが仕事場である武道館の真ん前で酔  
う気にはなれず一、二杯付き合う程度にしていた。

休日の昼はセルピーニャ（ビール）を飲みながらカラ  
ランゲージョ（泥カニ）を食べるのが楽しみであった。日  
本で食べる淡白な蟹と違い独特な味わいがある。私はヘ  
イ・ド・カラランゲージョ（カニの王様）という店が好き  
で通っていた。作家の開高健さんもその著作「オーパー」  
で紹介しているカニの専門店である。

店内には古ぼけた作業台のような四人掛けの木製机が  
並んでおり、注文すると茹でた熱々のカラランゲージョが

丸ごと机の上に無造作に盛られ、木の棒を使い直接机の  
上で殻を叩き割り指や歯を使ってかぶりつくのである。

ビザの切替えて日本に帰国する晩、空港へ行く前に山  
科先生の家でカラランゲージョを食べることになり、市場  
で買ってからタクシーで先生の家へ戻る途中で、カラ  
ランゲージョを結んであった紐が切れて二〇匹くらいの元気  
なカラランゲージョがタクシーの中で逃げ出し、車の中で  
あっちこっち挟まれながらカラランゲージョを追いかけた  
のは懐かしい思い出である。

タカカとは街角の屋台で売られているインディオから  
伝わる伝統料理である。

街角でよくみかけていたが、屋台で売られている変  
わった食べものだったのでなかなか手をだせなかったが、  
ある日思いきって注文してみた。

マンジオッカという芋を絞ったトウクピーという黄色  
い汁にゴマという同じくマンジョーカで作ったドロっと  
した澱粉を入れ、噛むと口の中が痺れるジャンプーとい  
う葉っぱと干しエビを加えたスープのような食べ物。木の  
実をくり抜いて作ったお椀のような容器に入れてすすり  
ながら食べる。好みてピメタ・ド・シエイロという香辛  
料を加える。最後に何か調味料を入れていたので瓶を見  
たら「AIINOMOTO」と書いてあったので思わず笑っ

た。しかし、この食べ物がやたらと後を引き、食べたくなる。しかし、この食べ物がやたらと後を引き、食べたくなる。となると屋台の夜鳴きラーメンを探すように街に出たこともあった。多分、痺れる葉っぱや香辛料に習慣性があるのではないかと思う。

## マラジヨール島

武道館の増築工事はサンパウロ武道体育館と同じ戸田建設が請負っており、サンパウロから来た日系建築士のSさんが担当していた。ある日、仲良くしていたSさんとアマゾン川のみえるレストランでランチをしていた時、河のはるか向こうにかすかに岸が見えており話に聞いたマラジヨール島かと思いい、「さすがにアマゾン川は大きいな」といったところ、あの岸はアマゾン川河口の中央に位置するマラジヨール島との間にある多くの小島の一つだと教えてもらい、アマゾンの大きさに驚くと同時に、マラジヨール島に大きな興味を抱いた。アマゾン川の河口幅は最大三六〇kmといわれ、マラジヨール島はその中州にある島で面積は九州より広く、日本人の感覚からは桁違いの規模である。

その後、休暇をとってSさんとマラジヨール島へ遊びに行くことになった。出航当日、港のフェリー乗り場は多

くの人でごった返しており、出航時間が過ぎてもなかなか出航しない。どうみても満員なのに乗船は続いており、定員数以上の切符を販売しているようだった。前年、アマゾン川で観光フェリーが定員を超過して出航し途中沈没して二〇〇人以上が肉食魚の餌食になったニュースが頭をかすめた。船内は押すな押すなの大混雑で、しまいにフェリー二階のデッキから一人足を踏み外して転落し運び出される騒ぎが起きたりしたが、なんとか遅れて出航、三時間くらいでマラジヨール島へ着いた。

Sさんの発案で、私たちはホテルには入らず奥地の民家に泊めてもらうことにしていた。土で造られた本当にシンプルな民家だったが本当のマラジヨールを感じる事が出来たと思う。ベッドはなくハンモックを吊るして寝たが、蚊が多いのはまいった。

朝は家の人達と一緒に朝食をとり、その後ゆっくりと島を回った。民家の近くにはマンゴの樹がいつぱいで、あたり一面に実を落としており、採る人もいないのか、野豚があちこちで実を食べていた。昼間は農場へ行きバッファローや馬に乗ったりして過ごした。夕方、宿泊した民家の裏の野原に出て仰向けに寝そべり夜空を見上げた時、辺り一面人工の明かりが全く無く、広がる草原の地平線から星が上がってくる満天の星空は、今でも

脳裏に焼きつき忘れることが出来ない。

## サンパウロへ

ベレンでの生活も徐々に慣れてきた頃、一九八二年七月二五日のサンパウロ支部武道体育館落成式で日本からの国士館訪問団（第六次）と合流するように指示を受け、ベレンからサンパウロへ向かった。サンパウロ到着後、一旦サンパウロ武道体育館のあるサンパウロ支部に着任した。

サンパウロ支部は国士館が現地に設置したブラジル国士館大学協会 (SOCIEDADE KOKUSHIKAN DA GAKU DO BRASIL 一九八〇年四月二九日ブラジル国認可) を実体とする組織であり、柳森優理事長、サムエル吉田理事（弁護士）、佐々木康之理事の責任体制で運営管理されていた。

その後、サンパウロ市内で柴田梵天総長を団長とする国士館訪問団と合流し、私はとりあえずリベルダーデ区の日本人街にある万里ホテルに宿泊した。このとき、空手道チームと久々の再会をし、その時に CEPEUSP の空手道を指導している佐々木康之先生に初めて紹介された。

佐々木先生は、支部の設立から運営にご協力頂いた先生であり、私にとってはブラジル赴任生活を通じ公私ともに最も関係の深い友人となった。佐々木先生は幼いころに両親と共にブラジルへ渡り、日本人指導者から空手道を学び、USP卒業後、USP体育教官として就職している。空手道の流派林立する中、ベレンの町田先生と共にブラジルでの松濤館流代表者として国士館のブラジルでの活動を支えて頂いた。先生は細身の体ながら力強い技を持ち現役時代はプロレスラーとの他流試合で勝利するなど実戦派の猛者として知られた。

国士館訪問団はサンパウロでの武道体育館落成式を終えた後、ブラジリアを経由してベレンへ回り演武会、大会を開催した後に日本へ帰国した。私は国士館訪問団と共に行動し、ベレン空港で見送った後、ベレン支部の道場で足かけ一年半の空手道指導後、後任の空手道指導員飯田隆男と交代しサンパウロへ移動することとなる。

この年一九八三年七月に日本の国士館で当時の理事が学内で刺殺されるという大事件が起きた。この事件を機に国士館は学園の運営体制が変わり、海外事業も見直され徐々に縮小されていく事になる。

一九八三年一二月、私はベレン支部からサンパウロ支部へ異動。支部内の職員用宿泊施設D1に入り、支部の



サンパウロ支部全景

(右上方に武道体育館とA池、右中央にB地区宿泊施設とB池、左上方にC・D地区を望む)

運営・管理業務に当たった。この当時、支部では須藤磐主事のもと、長谷轟、神戸洋一、相田勉、三嶋邦裕、川口雄大、小原政信、そして私が、時期は前後しながら日本から赴任し支部に常駐勤務していた。後に倉田幹雄が現地で専任職員として採用され加わった。三島邦裕は後に、サンパウロを離れポルトアレグレ市へ剣道指導員として派遣されている。川口雄大も後にベレン支部へ空手道指導員として派遣された。

サンパウロ市内では右田重昭、鳥飼利行、岩崎雅仁がUSPと剣道連盟等で剣道指導、中野雅之がUSPと柔道連盟等で柔道指導、細田三三、五百部浩一がUSPほかサッカークラブ等でサッカー研修、三雲千賀子、山口慶司がUSPで新体操指導、上地康夫はバルゼン・グラнде・パウリスタ市の日本語学校で剣道指導というように活動しており、当初、月に一度くらいサンパウロ支部武道体育館に集まり支部会を開いていた。それ以外に峯経治、鈴木輝一、苔米地示路、櫻田博、鷹取寛行、本藤直浩、薬師寺幸、野村加奈子がそれぞれジャカレイ日本語学校、松下サンジョゼ補習校、クリチーバ日本語教室等へ日本語教師として赴任していた。

## サンパウロ支部

サンパウロ支部はサンパウロ市の中心からラッポーズ・タバレス街道へ入り、四五km地点のバルゼン・グラデ・パウリスト市を左折し、パンデイランテス街道へ入り、三km進んだ四八km地点のバス停を右折し、舗装されていないカルモ街道を五kmほど進んだ回りを農場や別荘地に囲まれた場所にあった。道が空いていればサンパウロの中心から車で一時間半くらいの距離であろうか。

カルモ街道は舗装されていない土道で雨が降るとぬかるみ、車の通行は困難を極めることとなり支部を運営していた全期間にわたり大きな障害となった。雨が降ると途中の小川が氾濫し、一時車の通行が出来なくなったり、途中の坂道がぬかるみで普通の車では通行出来なくなることもあり、そのような時は陸の孤島のような状態となる。

サンパウロ支部の所在地はサンパウロ州サンロッケ市カルモ区イタコロミー農場五番で土地面積は五九万一三四三㎡、敷地内は四地区に分かれておりA B C D地区と呼び管理していた。

カルモ街道沿いに正門があり武道体育館まで一本の道

が敷地内を貫いていた。正門を入ると最初に広々とした芝生の広がるD地区、下り坂を下りきると左手にシユラスコ施設や遊戯施設がある。D地区を過ぎるとC地区に入り左手にC池、右手に丘、さらに進むと左手にB池があるB地区、突き当たりを左折して少し上り坂を上がるとA地区で、左右に丘が広がり、武道体育館前で道は行き止まりとなり、武道体育館裏手にはA池が佇んでいた。

D地区には支部職員用住居D1があり一階建ての4LDKで柴田総長用の部屋、来客用の部屋、須藤磐主事の部屋、支部職員用の部屋と大きな居間があった。外にはプールがあり広々とした芝生の庭が広がっており前の所有者が別荘として建てたものであった。

C地区にはC池と道を挟んだ向い側に日本から来た支部職員のための宿泊施設C1と食堂が作られ、日本から派遣されて来る支部職員と現地採用の日本人料理人が住み込んだ。C1の裏手には一〇本以上の柿の木が茂っていた。

B地区には合宿用宿泊施設に改築した宿舎B1があり、支部施設を使った合宿利用時の宿泊所となった。四部屋に二段ベッドが合計一二台備え付けられ二四人が宿泊出来、シャワー室・トイレ・食堂・台所があった。B



地区には他にも二段ベットだけを設備した宿泊所B3があり三〇名の宿泊が出来た。B1の裏手を上がって行くと日系人の使用人ネルソンと家族が住む住居があった。専任料理人が住込みで雇われるまで支部職員は使用人ネルソンの妻に内々の契約で昼食と夕食を作ってもらいネルソンの家で食事をしていた。

A地区には武道体育館と体育館裏手に支部職員用住居A1があった。A1は3LDKで、各支部職員が入れ替わりで宿泊した。

## 使用人

支部には地区ごとに使用人家族が四家族住んでおり、芝生・道路整備・建物の補修等の作業を行っていた。使用人達は陽が昇る前には自宅の鶏や畑の世話をし、七時ころには作業に入っていた。午前中に一回休憩をとり、昼休みは昼食前に池で釣りなどをして昼食を入れて二時間くらい休憩する。午後の作業が終わると釣りをしたり狩りに出かけたりして、夕食後暗くなると寝るという太陽の動きに合わせた生活をしている。

この地域にはいろいろな動物が棲息し、支部敷地内を出入りしており、ときどき使用人たちは仕事が終わると

狩りに出かけていた。使用人たちは年に数回、休日を替ってカピバラを狩りに出る。子豚くらいの大きさでネズミ科に属するという。彼らにとつての狩りは商売目的ではなく生活の一部となっており、食用は勿論、毛皮の利用から煮込んで摂った油は特効薬として家で保存され、塗り薬、飲み薬として重宝される。一度、使用人頭マニエルの家の前で大きな鍋でカピバラを煮込んでいるところを見た事がある。大体このカピバラの油で作った薬で何でも治してしまうようで、彼らは滅多なことでは医者に行かない。

しかしある時、マニエルが具合が悪く医者に行きたいので車を出して欲しいという。連れて行った先は普通の民家で、表で車を停めて待っていると三〇分位して出てきたが、体中から異様な臭いがしており、どうやら卵と何かを混ぜたものを背中に塗られお祈りを受けたようで、一週間体を洗ってはいけないという。その後、一週間くらいで体は治ったようでも有難がっていたが、私には自然治癒しただけのように思えた。

そんな彼らと蛙を狩りに行ったことがある。C地区とB地区の境に小さな沼地があり夕方近くを通るといつも蛙の啼き声が聞こえる。ある時マニエルがその蛙はハンという食用蛙だと教えてくれた。そこである晩、マニエ

ルを誘ってハンを狩りに出かけることにした。竹で作った小さな銚のような道具と懐中電灯を持ち、暗くなつてから沼地に入るといつもの啼き声が聞えてくる。マニエルは懐中電灯をバツと蛙に照らすと目眩しの効果が一瞬うごかなくなり、その瞬間に銚で一突きである。何匹が獲りマニエルが慣れた手つきでさばき、皮を剥ぎ粉をまぶし、油で素揚げにしてくれた。そのみてくれとは正反對にフランスでの高級料理のような上品な食感と味で絶品であった。

### サンパウロ支部での指導業務

翌年の一九八四（昭和五九）年にサンパウロ学生会（一九四九年社団法人としてブラジル政府認可）の運営するアルモニア学園から空手道の指導依頼が寄せられ、週二回サンパウロのサンベルナルド・ド・カンポ市にある同学園へ指導に行く事となった。

この頃、支部では少しでも採算性を上げるため支部施設の有効活用を最優先課題として検討を重ね、外部の団体に施設を貸し出し施設使用料として収益を上げる事と、武道体育館で空手道・剣道を指導し月謝を徴収する事などを実施した。生徒は主に地元バルゼン・グラン

デ・パウリスト市の住民で、約八kmの道程を週三回通ってきてくれた。支部での空手道と剣道の指導はその後、指導職員が日本へ転勤帰国するまで一〇年以上続いた。その間、日本から四人の空手道師範を講師として招き、全伯から参加者を募り、支部内宿泊施設と武道体育館を使い、支部主催の空手道講習会及び空手道大会を四回開催した。剣道も同様の講習会・大会を開催している。

支部の活性化と少しでも収益を上げるため、ベレン支部の施設売却益をサンパウロ支部へ再投資し武道体育館二階にトレーニング機器を導入してウエイトトレーニング、ボディビル、エアロビクス等を合わせた教室を開始し、サンパウロでジムに通い指導教本を取り寄せ、見様見真似で指導に取り組んだ。また、武道体育館にあったレクリエーション用具のバドミントンセットをヒントに数組のバドミントンラケットを購入し、武道体育館にあったバレーボールネットを使ってエアロビクスに来ていた空手道生徒の親たちに遊びでやってもらったところ評判が伝わり人気となったことから、正式にバドミントンクラブとして発足させ月謝制とした。正規規格のバドミントンボールとネットを特注で作り、サンパウロのCPBというバドミントンクラブに入会し指導を受け、その内容を受け売りで、そのまま支部で指導した。国士館バド



1984年9月9日 第1回国士館大学サンパウロ支部空手道大会

ミントンクラブとして連盟に登録し、最盛期には会員数も四〇名を数え、武道体育館いっぱい、四面の正規コートを作り、選手からは後にサンパウロのクラブに移籍後、ブラジル選手権で優勝する選手まで輩出した。連盟公認の年間バドミントントーナメントに国士館カップが加わり、支部武道体育館にサンパウロ州各市からの代表クラブを迎え開催するまでになった。

このバドミントンを通じて一人のブラジル人Y氏から、私は大きな影響を受けることとなった。Y氏は医師を職業とし、CPBというバドミントンクラブの役員であり、私が支部でバドミントンクラブを開設する為にCPBに入会し練習を重ねていた時、バドミントンの技術からクラブの運営方法にいたるまで親身に指導してくれた友人であった。支部バドミントンクラブの設立から二年くらい経ち、会員数も毎月三〇人〜四〇人前後で推移するようになりクラブの運営も軌道に乗っていたある日、私はY氏にこれまでの協力で謝意を表すと同時にお礼をしたいと申し出た。この時Y氏は、感謝の気持ちは私にはなく他の人や社会に向けてくださいとお礼の申し出を辞退された。誰かから受けた恩を直接その人に返すのではなく別の人、社会に送るといふY氏の考え方には私は静かな感動を覚えた。この日以来、今日に至るま

で、このY氏の教えは私の課題となっている。

## 本場のシユラスコ

アルゼンチンのエルドラード市で南米親善パドミンント大会があり、国士館からも数人ブラジル代表で選ばれており、国士館パドミンントクラブの仲間達と一緒に連盟のツアーに参加したことがあった。大会最終日にはシユラスコパーティーがあり大いに盛り上がった。

ブラジル同様牛肉生産では世界的に有名なアルゼンチン、その食べ方も豪快である。その日は朝からシユラスコパーティーの準備で焼き場周辺は大忙しであった。直径三〜四cm、長さ一五〇cm位の生木の枝が一〇〇本以上用意され、女性たちがナイフで枝の皮を削いでいる。焼き場付近には五メートル四方くらいのビニールシートが敷かれており、そこへ荷台に牛肉を積んだトラックが入ってくると、荷台が上がりシートの上にザーと肉が下ろされた。その量たるや何百キロ？見当もつかない。その肉を朝から用意した木の枝で串刺しにする。焼き場はレンガ造りの高さ八〇cm位、幅は一五〇cm位の串刺しがセットできる幅で二列あり、長さは二〇mくらいという規模で既に炭が敷いてあった。



シユラスコパーティーの準備を手伝う筆者

男たちが炭火を調整し始め、辺りに煙が立ち込めてくると串刺しの肉がセットされ、焼き場いっばい肉で埋め尽くされた眺めはまさに壮观であった。その後、焼き上がった肉は会場へ運ばれビールと共に平らげられてしまった。南米での焼肉はしつかりした歯ごたえと岩塩だけの味付けという豪快さが持ち味である。戦績はさておき、シユラスコパーティーと共に忘れられない南米大会であった。

## 永住権

渡伯後何年目だったか、私のビザは三か月を更新して六か月の滞在が認められる観光ビザから、一年を更新して二年間滞在できるテンポラリビザへと変わっていた。

当初から心の内では永住覚悟の赴任だったので永住権取得関連の情報収集には気を配っていた。

何回目かのテンポラリビザ更新のとき、いつも手続きをしてくれる弁護士が「今年は不法滞在者に永住ビザを出す年だ」という。ブラジルでは正規の入国手続きを経ずに密入国した不法滞在者が多く、パスポートもIDも無く正規の職に就く事も出来ずに地下に潜り犯罪社会を構成している。政府はこのような不法滞在者に対し一〇

年に一度、永住ビザを発給して基本的権利を与え正規の職に就かせ、犯罪社会を少しでも減らそうとしている。

今年はその年だから、ビザの更新期限が来ても更新手続きをせずに不法滞在者になれば永住ビザを貰えるはずという。さすがに考えてしまった。日本の国士館にこんな説明は通りそうもない。結局正規の更新手続きをし、並行して永住ビザの申請もした。案の定、数か月後に不法滞在者に対し永住ビザが発給される事となった。私も弁護士を通じて申請を出すと、法務局から「あなたは不法滞在者ではなく正規の更新手続きをしているので出せない」という。この国での生き方をまた一つ勉強した。

## 小学校入学

ベレン支部でもそうだったが、サンパウロ支部でも生徒は殆んどブラジル人で日本語は通じないので、拙いポルトガル語を駆使して指導していた。しかし自己流では限界を感じ始めていた頃、支部主催の空手道大会を開催した際に地元バルゼン・グランデ・パウリスタ市の市議会議員で地元小学校校長の村山シゲアキ氏を招待したことから村山校長と親しくなり、ある時小学校を訪ね入学を願ひ出た。村山校長は驚かれたが快く許可を出してく



ださり、その後何かと支援していただいた。業務の合間を縫って通学し何とかお情けで小学校卒業資格を取得した。更には上級学校へ進みたいと相談したところサンパウロ市にある、日本でいえば中学校にあたる学校の速成コースを紹介していただき紹介状を書いてくれた。アルモニア学園に空手道指導に赴く前後や、その他何かと都合をつけて学校に通い、何とかコースを修了する事が出来た。おかげでポルトガル語をはじめブラジルの、歴史、社会、科学、その他の基礎的な学習をする事が出来た事は勿論であるが、小さな子供たちに冷やかされ、かわかれ冷や汗をかきながら勉強したことは忘れられない思い出である。

### ブラジル空手道事情

ブラジルの空手道は、日本から渡った各流派所属の日本人指導員によって広められ、日本人指導員主導の各流派団体組織が作られてきた。しかし、一九七〇年代後半から日本人に学んだブラジル人の弟子たちが独立して各組織の主導権を持つようになり、唯一政府から認められる公式の組織も弟子であったブラジル人空手家が主導権を持つこととなる。

日本で生まれた空手道が世界で広まり、それぞれの国で組織が成熟する過程において、現地の弟子たちへバトンが引き継がれていく段階で既得権益を失うこととなる日本人指導者と、新たに権益を得ることとなる現地人指導者との間に、しばしば確執が生まれることとなる。同様の流れは一九八〇年代のブラジルでも顕在化していた。また別の問題として、空手道が普及するにつれて起こる空手道のスポーツ化に対し、一部の日本人指導者たちは伝統的空手道の存続をはかり、独自の思想・技術体系に則った組織作りも行っていた。

そのような事情のなか、国士館はスポーツと伝統武道の両面を重視した人格陶冶に結びつく空手道を模索することとなる。

### ブラジルの経済と生活

私が赴任した一九八二年当時、ブラジルは国際社会に対し債務返済が不能となりモラトリアムを発表し、その後IMFによる国家経済への介入、国際銀行団との債務返済繰り延べ交渉と国中が混乱し、マラリア熱に侵されたようにインフレ熱に侵されていた。一九九〇（平成二）年には年間インフレ率は生活必需品では年間

五〇〇〇%を超えていたといわれ、国民生活は限界に達していたように思われた。政府の発表する公式インフレ率はデータラメで、国は国民の信頼を失い、スーパーマーケットでは毎日のように価格が書き換えられ、映画館の料金が午前と午後で値上がりして書き換えられた時には最早これまでかと思つた。

現金を持っていると価値が下落して、指の間から現金が落ちて無くなつていくように感じられ、こうなると現金を持ち歩くものはいなくなり何をかうにも小切手を使うようになる。銀行口座を常に運用し、振り出した小切手の支払日にその金額だけ運用口座から普通口座に入れるという忙しい毎日である。それでも通貨の目減りが激しく、銀行で運用したり、闇ドルや中古車市場、その他庶民で出来る運用では、全てインフレの数字に勝てるものはなかった。

そのような状態の中、一九九〇年三月一五日、政府は突然一定額以上の銀行預金凍結を発表したのである。青天の霹靂とはまさにこのことで、国中が混乱の極みに達したことはいうまでもない。

数年後に凍結が解除された時、政策の失敗によりハイパーインフレーションが続き、預金者の手元に返された預金額は、実際のインフレ率とはかけ離れた政府発表の

公式インフレ率を基にして利子が計算されており、中間層の多くは財産を失い、企業倒産と多くの失業者を生み出す結果となつた。

## マチュピチュ

一九八三年一二月の末、リベルグデー区の日本人街に出かけた帰り、万里ホテルへ寄りいつものようにマネージャの千葉さんと世間話をしていた。万里ホテルは国士館訪問団で団体利用して以来馴染みにしており、リベルグデーにきた時にはレストランやロビーを利用していた。

ソファに座り何気なく壁の南米地図を眺めていると目に止まったのがペルーのマチュピチュである。以前から興味を持っていたところでもあり、せっかく南米に来ていたので足を伸ばそうという気が湧いてきた。

翌日から情報を集め、一二月三一日の朝には旅行カバンを背にブラジル内陸への基点となるルース駅の前に立っていた。何時間列車に揺られたのかはつきりとは憶えていないが、途中列車が故障しトレースラゴアスという駅で止まったまま動かなくなり、三時間くらいいらとうとう列車から降ろされてしまった。この先のカン

ポグランドという駅までバスを用意するので乗ってくれ  
という。カンポグランドといえは小野田寛郎さんが牧場  
を開いたことで聞いたことのある地名である。

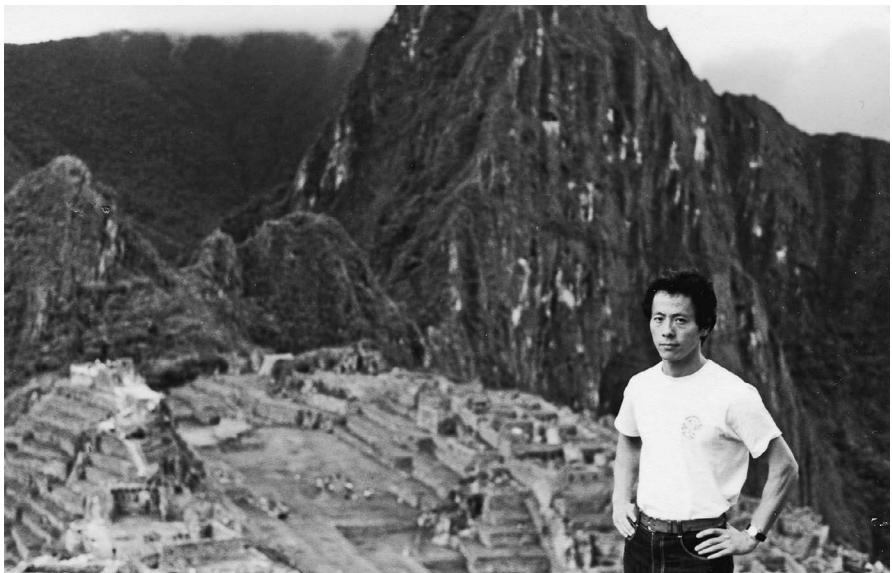
南半球の一二月は夏で、特にこの日は暑かった。全員  
エアコンも付いていないオンボロバスに乗り込み舗装さ  
れていない土道をカンポグランドへ向かった。

五台のバスが連なって走り土煙で前のバスがすすんで  
見える。あまりの暑さに窓を開けると土煙で体中砂だら  
けになった。

この辺りは見渡す限りの大草原で延々と景色は変わら  
ない。三時間くらい走りカンポグランドに着くと列車が  
待っており、直ぐに乗り込みボリビアとの国境に向かっ  
た。既に夜になり辺りは真っ暗だったが湿地帯を走って  
いるのは分かった。ブラジルとボリビアとにまたがる世  
界最大の湿原地帯といわれているパンタナールである。

いつまで走っても湿原で景色は全く変わらなく、いつ  
の間にか眠っていると突然列車が止まり汽笛を上げた。

車掌が「Feliz ano novo (happy new year)」と声を上  
げながらワインと紙コップを持って車両を回って振舞っ  
ている。気さくなブラジル人は車内でワイワイと楽しん  
でおり、私も乾杯を受けいつの間にか身振り手振り輪  
のなかで仲間に加わっていた。



1984年1月 マチュピチュにて

翌朝、終点のコロンバに着きタクシーで国境に向かったが何処が国境か分からない。運転手が、ここが国境だという素振りなので降りると、辺りには草むらの平原と平屋建ての建物が数軒あった。そこがホテルのようで、私がバスポートを見せるとハンコをおしてくれた。これで出入国手続きは完了?…。

この後、ボリビアのサンタクルスからラパスを経てア ندスのチチカカ湖をバスで周りペルーのプーノからクスコに着き、列車でマチュピチュへ登りインカの遺跡に辿り着くまでに片道一週間の旅であった。この間、置引きにあったり、高山病に罹ったり、騙されたり、素晴らしい出会いがあったり、と思いの尽きない旅ではあったがとも本稿には収まりそうもなく割愛させていただく。

## その後

一九八〇年四月二十九日、サンパウロ市に国士館サンパウロ支部が、同年六月三日、ベレン市に国士館ベレン支部がそれぞれブラジル国から認可を受け発足、途中一九八六（昭和六一）年三月三十一日の理事会決定によるサンパウロ支部とベレン支部の統廃合によりベレン支部

は閉鎖され、同支部資産は町田嘉三氏へ売却された。サンパウロ支部資産を引き継ぐ組織として学校法人国士館ブラジル支部 (FUNDACAO ESCOLAR KOKUSHIKAN) が同年三月一九日ブラジル国から認可を受け発足。その後、理事会によるブラジル支部閉鎖決定により、一九九七（平成九）年同支部資産はブラジル日本文化福祉協会へ寄贈された。最盛期の一九八三（昭和五八）年には、二九人の専任教職員を派遣した国士館によるブラジルへの海外事業はここに幕を閉じた。

ブラジル日本文化福祉協会に寄贈された旧学校法人国士館ブラジル支部の広大な施設は、現在同協会により運営管理され、「国士館大学スポーツセンター」としてブラジル日系人社会の憩いの施設として活用されている。同協会ホームページに掲載されている同スポーツセンターの案内ページ (<http://www.bunkyo.org.br/ja-JP/centro-esportivo-kokushikan-daigaku-ja>)〈アクセス：二〇一七年一月一三日〉を紹介し、本稿を閉じることとする。

## あとがき

赴任生活の実態を紹介することで国士館によるブラジ

国士館大学スポーツセンター



サンパウロ市から 51 キロ西方面に位置するサンロケ観光指定都市にある国士館大学スポーツセンターは、ブラジルと日本の交流のすばらしい光景をわたしたちに見せてくれる施設です。

日本の国士館大学によって設立されたスポーツセンターは、1997 年に文協に寄贈され、58 ヘクタールという広大な敷地の一部は、いまだに大西洋岸森林地帯に属する原生林で覆われています。自然に囲まれたスケールの大きな土地で多くの人たちが心地よい時間を過ごしています。

主な建造物は武道各種の稽古場として建てられた体育館ですが、その他にも、マレットゴルフ用のホールやテニスコートが設置されています。この国士館大学スポーツセンターを魅力的なものにするのはなんと言っても 400 本の桜の木々です。美しく咲き誇る満開のサクラを愛でるためにサンパウロ州南部の日系諸団体と共催する 7 月の桜祭りは、文協の主要行事の一つとなっています。桜祭りは毎年、1 万人を超える人たちで大変賑わいます。まだ一度も桜祭りに参加したことのない方、今年の桜祭りに是非お越しください！また大自然の中で癒されたい方も是非こちらまで足をお運びください。

場所：Rodovia SP-250, km 48, São Roque-SP

時間：月曜から土曜-9 時から 17 時

情報：(11)3208-1755 com Wilson ou patrimonio@bunkyo.org.br

ブラジル日本文化福祉協会ホームページより

ル海外事業の理解に繋がれば、との思いから国士館史資料室の求めに応じ筆を執った。

二〇代中頃から三〇代の終わりにかけた一三年間にわたるブラジル赴任生活を振り返ってみると、仕事上のことは勿論、プライベートでも多くの出来事が思い起こされ、与えられたスペースにはとてもおさめることは出来なかつた。

この間、中南米に民主化運動が巻き起こりブラジルの政治経済は、一九八五（昭和六〇）年三月に二一年間に及ぶ軍事政権の終焉、一九八七（昭和六二）年二月対外国債務金利支払停止、一九八九（昭和六四）年一月大統領直接選挙、一九九〇年三月銀行預金凍結等、国民生活の大混乱が続き、五回におよぶ一〇〇〇分の一規模のデノミという経済金融台風が吹き荒れ、赴任生活も大変不安定なものとなった。

しかし、ブラジルはそのような状況を乗り越え、今日 BRICS を構成する大国となり、オリンピック・パラリンピックを開催するまでになった。リオパラリンピックでの報道でブラジルの人々が「ブラジルではバリアフリーのインフラ整備は不十分だから私たちがそれを補い助け合うんだ」という趣旨の発言が流れていた。

日本の社会はインフラ整備に頼るだけではなく、ブラ



ジルの人々のように人間性による社会づくりを模索する必要性があると思う。国士館は武道・スポーツ・文化交流を目的としてブラジルへ渡ったが、外国人が日本の武道を通じて探し求める人間性は、ハイテク社会の発展と共に、実は日本人自体が失いかけているのかもしれない。

犯罪が多発する反面、庶民による相互扶助社会が根付くブラジル。赴任生活を通じて豊かな人間性に触れることが出来た事は何にも代え難い経験だった。このような経験の機会を与えていただいた国士館と諸先生方、そしてブラジルの人たちに感謝を申し上げ本稿のあとがきとしたい。

本稿を書き上げるにあたり国士館とブラジルの関係情報のご調査にご協力頂いた国士館史資料室と図書館・情報メディアセンターレファレンスの皆様方にお礼を申し上げます。

そして最後に、ブラジル赴任中から今日に至るまで私を支えてくれた妻と息子にこの場を借りて感謝を伝えたいと思います。

ムイト オブリガード！